

VALENELYA

世界をつなぐ クリスマス

+



M.N. Popa

どうぞ入って。あなたの席もあります。

家がにぎやかな声で満ちている人へ。
今年、空いた椅子を見つめている人へ。
贈り物が届くとは思っていなかった人へ。

私たちの食卓には、いつでももう一人の席があります。

年齢も、生まれた場所も、VALENELYAを知っているかどうか関係ありません。
ここの世界を何も知らなくても、どうぞお入りください。

この旅は贈り物です。ある家族と好奇心いっぱいの犬、そして思いがけない場所でも居場所を見つけるクリスマスの物語。

さあ、どうぞ。Tittiはもう最初の一步を踏み出しました。

よい旅を！
M.N. Popa

旅の道しるべ

ローマ—クリスマス・イブ	4
Amarylion	12
Draconia	26
Astralis	40
Magoria	54
Oneiria	68
Noxarium	82
Atlantis	96
Olympus	110
家に帰って	124
贈り物は続いていく	125
制作・お問い合わせ	126

ローマのクリスマス・イブ。日が暮れようとしていました。明かりの
ともる窓の向こうでは、ある家族がお祝いの支度をしていました。



M.N. Popa : やっと家族みんなで過ごせる夜だ !

Tatiana : 今夜ぐらい、外の世界
には待っててもらいましょう。



Arianna : でも、ツリーは勝手に飾りつけてくれないよ !

Arianna : Titti、そのリボン返して！

M.N. Popa : もうプレゼントを決めた子がいるね。



Gabriele : こっちへおいで、いたずらっ子！

Gabriele : お父さん、この生き物たちを全部、本当に自分で思いつくの？

M.N. Popa : ときどき、何人かには会ったことがあるような気がするんだ。



Arianna : 私はドラゴンを見たい。すぐ近くで。

M.N. Popa : たくさん本を作ってきた。でも、まだぴったりの一冊が見つからないんだ。

Tatiana : あなた、誰にぴったりの本なの？



M.N. Popa : 笑顔が必要としている誰かに、かな。

Arianna : 見た ? ページが動いてる !

Tatiana : あなた……これ、普通なの ?



M.N. Popa : 私の本の中ではね。うちのテーブルでは、普通は起こらない。

M.N. Popa : みんな、そばに！ 手をつないで！

Tatiana : Tittiは？



Arianna : ここにいるよ！

M.N. Popa : 待って……このページは私が書いたんじゃない！



Tatiana : えっ……ここはどこ？

M.N. Popa : Amarylionだ。



Arianna : お父さんの本に出てくる街？

ローマは夜でした。けれど、扉の向こうの街は目を覚まし始めていました。

Tatiana : あなた、私たちのクリスマスはどうするの？

M.N. Popa : まず、ここでは
どう祝うのか見てみよう。



Irena : それなら、ひと口どうぞ！

M.N. Popa : Aldren ! Kaelor !

Aldren : どこかでお会いしましたか？



Gabriele : この人が作者のM.N. Popaです。でも今日は、やっぱり案内してもらわないと！

Tessa : Darian、荷車に気をつけて！

Darian : あのリボンを止めてくれ！



Arianna : 一本つかまえた！



Aldren : Tessa、あそこへはどうやって下りる？

Tessa : 横の階段からよ。来て！

Gabriele : Tittiを見て。最後的一本を見つけたよ！

Tessa : 仕事はあとでもできるわ。さあ、ごはん！

M.N. Popa : 私たちの席もありますか？



Darian : もちろん。Aldren、椅子を足して！

M.N. Popa : 私は今日のことを書いていない。

Darian : 私たちはページとページの間でも暮らしているんですよ。



Arianna : じゃあ、今日は一緒に作ろう！

Tessa：おいで！ 楽隊がここを通るわ！

Gabriele：Arianna、やってみようか？



Arianna：私についてきて！

M.N. Popa : 一曲、踊っていただけますか？

Tatiana : あなた、ステップは知ってるの？



M.N. Popa : 理論上は！

Arianna：私たちのリボンだ！

Gabriele：まだちょっと曲がってる。



Tatiana：だから、すぐ見つかるのよ。

Arianna：あそこが市場だ！

Gabriele：それに、あの橋……リボンを
拾ったのは、ちょうどあの下だったね！



Tessa：少し詰めて！ また友達が来たわ！

M.N. Popa：私たちはお客だと思っていました。



Darian：お客さんだって、お盆ぐらい運べますよ！

Tatiana：おかげで、自分の家にいるようでした。

Darian：また会いに来てください。



Arianna：ほかの世界では、どんなふうに祝うのかな……

Arianna：お父さん……あれ、翼？

M.N. Popa：どうやら旅はまだ続くようだね。



来たときは、どこへ行けばいいのかもわかりませんでした。今は、また会いに帰ってこられる人たちがいます。

Arianna：お父さん、見て！山の中に街がある！

M.N. Popa：Carpaticaだ。ここではどう祝うんだろう……

Tatiana：あなた、行ってみましょう。



Draconiaを歩いてきたM.N. Popa一家は、Carpaticaにたどり着きました。

Tatiana：いい
におい！もう
お祭りみたい。

Nerina：もうすぐです
よ！でも、誰か配達を手
伝ってくれないかしら？

Arianna：私たちがや
る。ね、お父さん？





M.N. Popa : こんに
なにくさん！
荷車に載るかな？

Nerina : どの地区も何か
持ってくるんです。夕食
はみんなのものだから！

底なしの石は広場の真ん中にあり、その周りではいつもの暮らしが営まれていました。

Gabriele：お父さん
……車輪は別のところ
へ行きたいみたい！

M.N. Popa：荷車は押さえ
る。みんなは夕食を守って！

Nerina：直
せる人を知っ
てるわ！





Branik : 直しておくよ。
その荷物を運ぶのを手
伝ってくれるかい？

Gabriele : 決
まり！ は
い、金づち。

Tatiana : 終わったら、一緒
に夕食に来てくださいね。

Cineritiの中庭で、車輪は元どおりになりました。困
っている人には、必ず誰かが手を貸してくれました。

Vesna：共同の食卓
へ届けてね。みんな
に、よいお祝いを！

Tatiana：ありがとう！
みなさんも待っています。

Gabriele：今度こ
そ、車輪に頑張っ
てもらわないと！





Ordan : 配達は終わったかい？ じゃあ、挨拶する時間はあるね。

Arianna : Ordan、一緒にお祝いに来て！

Ordan : 喜んで。その前に、空からCarpaticaを見てみるかい？



Roxana : ようこそ ! 私は
Roxana。こちらはLarissa。
私たち、姉妹なの。

Larissa : そして、
この子がRex ! お
祝いに間に合った ?

M.N. Popa : もち
ろん ! 夕食でみ
んなと会おう。



Tatiana : みんな大丈夫？ Tittiも？

Gabriele : うん、お母さん。
一番いい席を取ってるよ！

Ordan : それじゃ……出発だ！



Arianna：あそこ！
広場の岩だ！

M.N. Popa：今朝
はまだ道を歩いて
いたのになあ……

眼下では、Carpaticaのテラスにお祝いの明かりがともり始めていました。



Ordanは一家をDrakhenの中庭へ送り届けました。
地面に下りるより先に、音楽が迎えてくれました。

Gabriele：もう
戻るの？ もう
一周したいな！

Tatiana：あとでね。
聞こえる？ 踊りに
誘われているわ！

Nerina : ここへ一歩
……それから回って！

Gabriele : 待つ
て！ もう向こう
まで来ちゃった！

Tatiana : あな
た、支えて！
目が回る！





M.N. Popa : 来た
ね！ 席を取っ
ておいたよ。

食卓を囲む輪には、新しく来た人の席がいつもありました。

Branik : 車輪はま
だ回ってるかい？

Gabriele : ばっちり。
休みたがっているの
は、僕の足のほう！



Arianna : お父さん、
また会いに来ようね？

M.N. Popa : Ordan
に、この旅の続きを話
す約束をしたからね。

Ordanや新しい友達に別れを告げ、M.N. Popa一家はまた歩き始めました。

Gabriella : Astralis
へようこそ。

Tatiana : 人がいっぱい
……みんな忙しそうね。

Gabriella : 最後の
鐘が鳴るまで待つ
てください。



Tatiana：お祝いはい
つ始まるんですか？

Gabriella：最後の鐘が鳴ったら、みんなで食卓を囲みます。



Elaria : あなた、
これが最後だって
言ったでしょう。

Teren : そうだよ。今、
仕上げているところ。

Tatiana : 誰かに似
ていると思わない？



M.N. Popa : 私だっ
て、あと一ページ書
くだけだったんだ。

Tatiana : ええ。三時間後
にも、まだそこにいたわね。

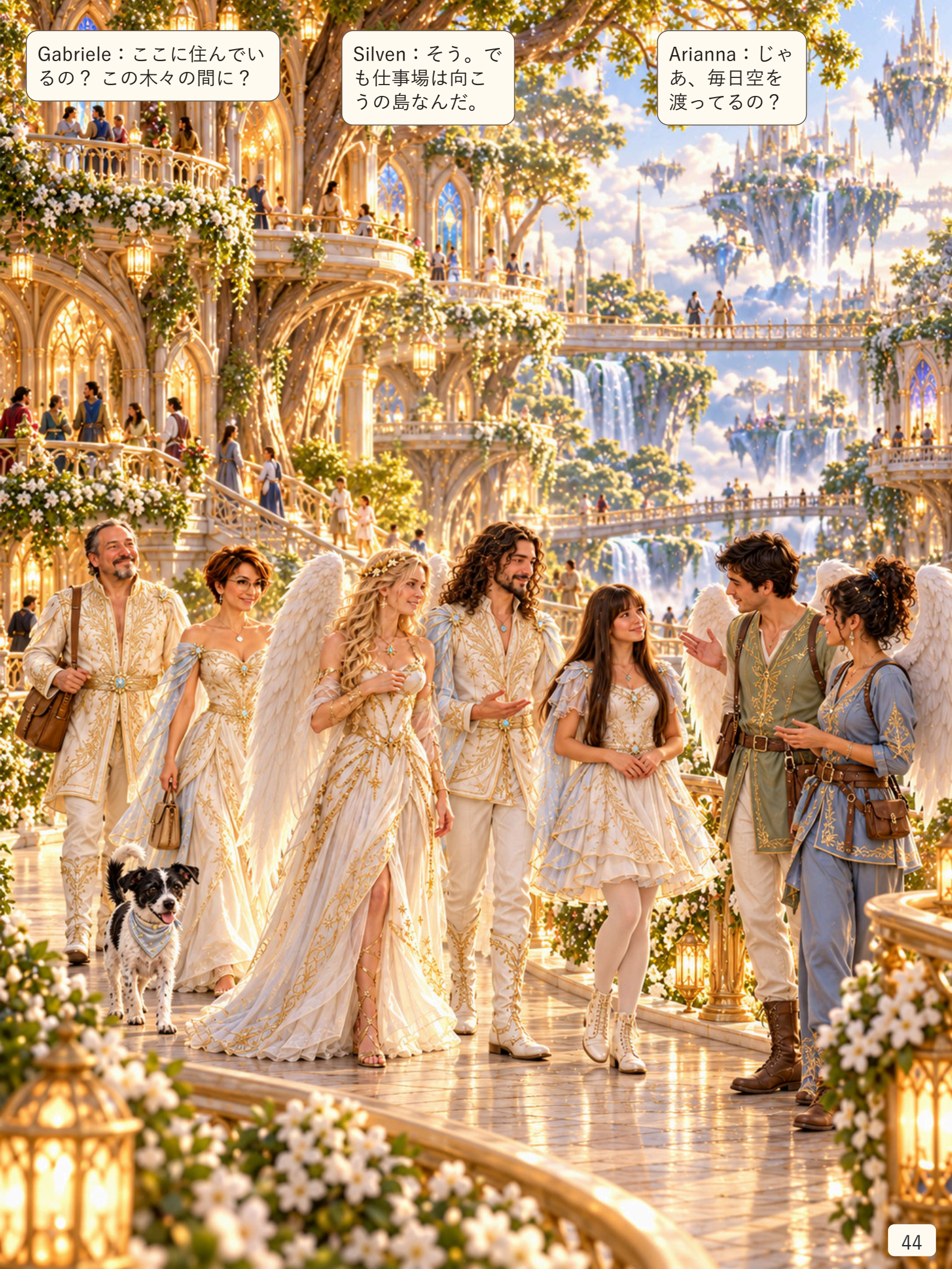
Elaria : 今夜はテラ
スへ来て。みんなで
食べるものは、私た
ちが持っていくわ！



Gabriele：ここに住んでいるの？ この木々の間に？

Silven：そう。でも仕事場は向こうの島なんだ。

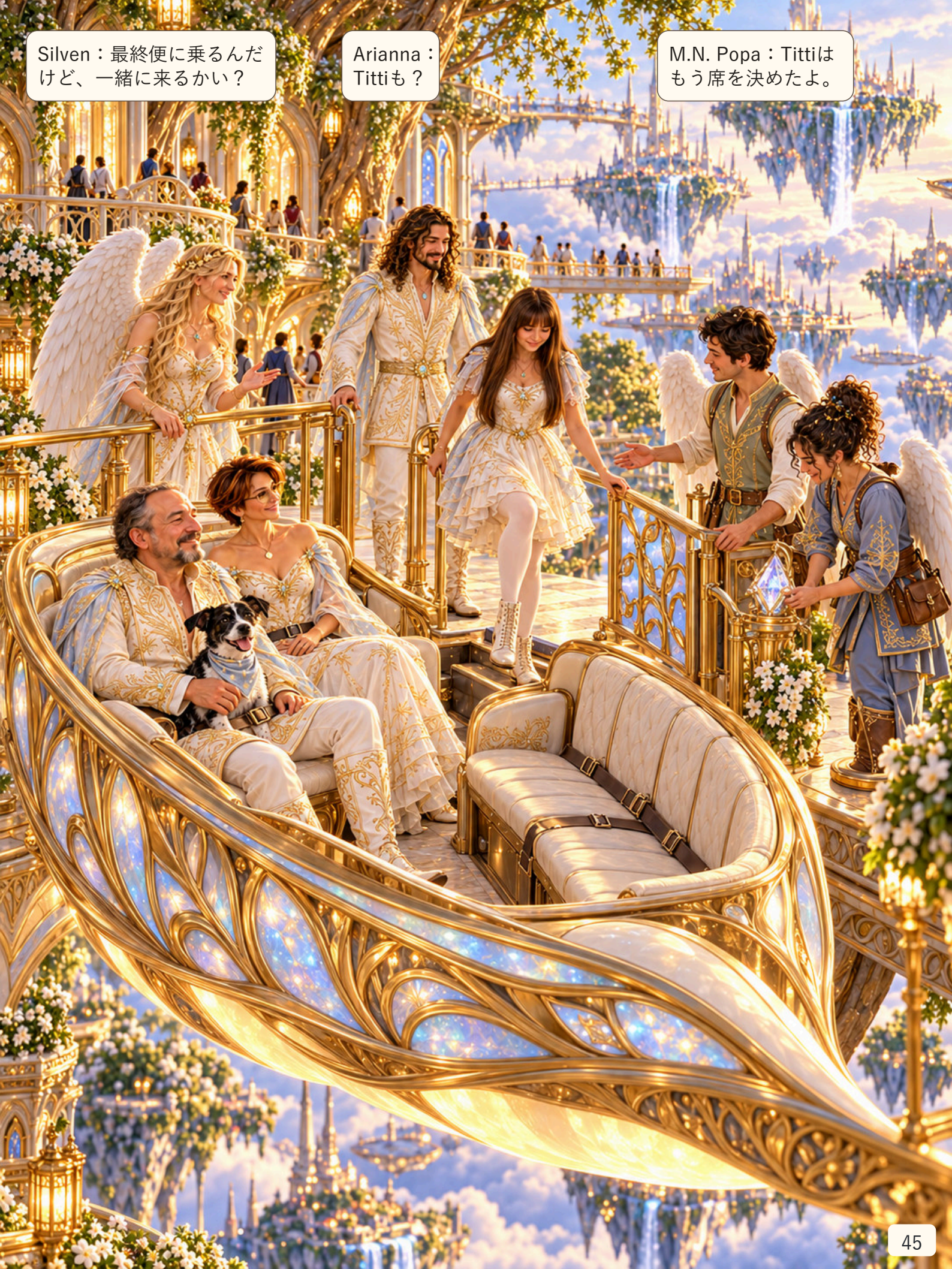
Arianna：じゃあ、毎日空を渡ってるの？



Silven : 最終便に乗るんだけど、一緒に来るかい？

Arianna :
Tittiも？

M.N. Popa : Tittiはもう席を決めたよ。





Arianna : お父さん、島がいっぱい！

Gabriele : これが、仕事に行く道なの？

Silven : 風が強すぎない日はね。



Tatiana :
鐘の音……

Gabriella : も
うすぐ最後の鐘
が鳴ります。

M.N. Popa : あそ
こを見て。店が
閉まり始めた。

Elaria : 来てくれたのね！ 席を取っておいたわ。

Tatiana : 無事に仕事を終えられたんですね！

Teren : 今度こそ、本当にね。



M.N. Popa : M.N. Popaです。
お会いできてうれしいです。

Arianna : お父さん
は作家なの。

Aurel : それなら、今夜
は聞き役だね。ここ
には話がたくさんある。



Silven：そちらでは、クリスマスはどう過ごすんだい？

Gabriele：みんなで食卓を囲むんです。誰も最初に席を立ちたがらなくて。

Tatiana：特にデザートが出てくるとね。



Tatiana : あなた、
いらっしやい。

M.N. Popa : ゆっ
くり。このステッ
プは知らないよ！

Tatiana : 私についてきて。



Gabriella : Paxに
も何か持ってい
きましょうか？

Tatiana : 待って、
これを入れるわ。

M.N. Popa : 行こ
う。旅の話もし
てあげないと。



Pax : 君も踊ったのかい？

Tatiana : 証人
になりますよ。



目の前のAstralisでは、お祝いがまだ続いていました。

Arianna：お父さん
……あの森のかけら
が、こっちを見てる。

M.N. Popa：森全体に見られ
ていなければいいけどね。

Gabriele：それ
はどうかなあ。





Tatiana : そっとね、Titti。向こうから来るのを待ちましょう。
Gabriele : あの耳、見た？

Arianna : 扇が二つみたい！
M.N. Popa : Titti、着いたばかりなのに、もう遊び相手を見つけたんだね。

Nadia : Magoriaへようこそ！
森と知り合っていたの？

Arianna : 森のほうから、私たちに会いに来たの。
M.N. Popa : Tittiにはもう友達ができました。



Tatiana：どうしたら全部見て回れますか？
Nadia：まず根元から。それから、あそこへお連れします。

Gabriele：ずいぶん上まで登るんだね。
Nadia：ありがたいことに、全部階段じゃないのよ。



Gabriele：水を上へ運ぶの？
Brom：それもね。今日は買い物
した品物を運んでる。
M.N. Popa：うちにも欲しいな。



Arianna：小さいのは妖精用？
Milo：そう。大きいのは、お祝いの広場へ持っていくんだ。

M.N. Popa：根元のほうから来て正解だったね。
Tatiana：あなたは、においについてきただけでしょう。





Lilia : こっち！ うちを見せてあげる。
Arianna : あの二枚の葉っぱの間？

Lilia : そう。待って、窓を閉める
ね。リスが入ってきちゃうから。

Tatiana : 下からは、こんなに
広いと思わなかったわ。
Gabriele : 広場を見て！
もう明かりを飾ってる。

Nadia : 次はあそこへ行きます。
M.N. Popa : あのほうき、駐車
してあるんですか？





M.N. Popa : やっぱ、あのほ
うきは本当に飛ぶんですね。

Nadia : ええ。でも、まず地面で
できることから始めましょう。



Gabriele : もうそれくらいでいいんじゃない？
M.N. Popa : 少なくとも、雨が降ったら全員で
雨宿りできる。

Arianna : Nadia……私もやっていい？



Tatiana : これはクリスマ
スの食卓に飾りたいわ。



Arianna：金色の髪にしてみたい。それと、お姫様のドレス。
Nadia：一緒にやりましょう。まず、何が欲しいかよく決めてね。

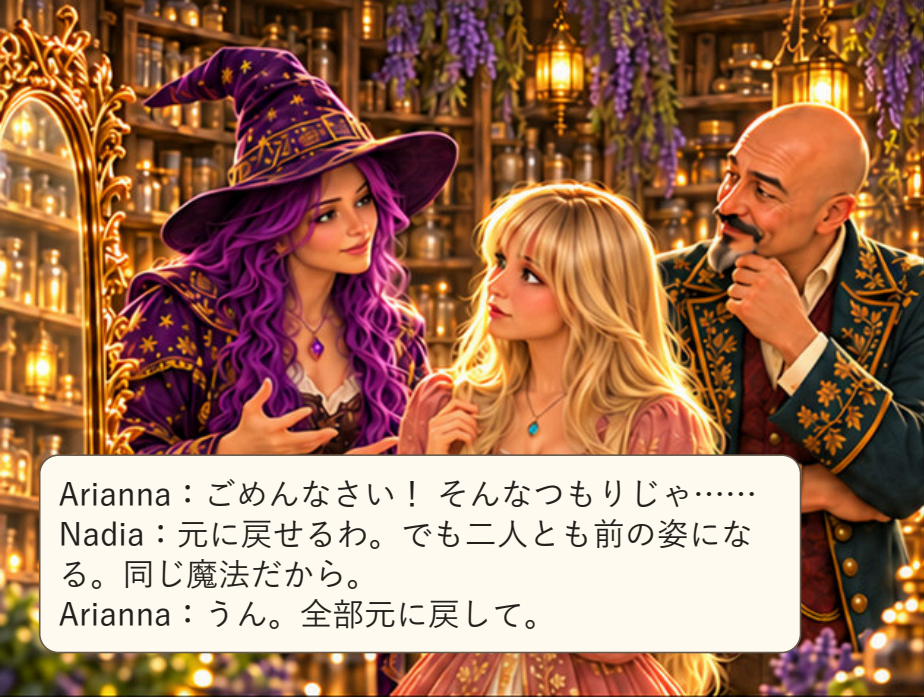


M.N. Popa：この小さな壺は空っ……



M.N. Popa：壺が空かどうか、聞いただけなのに。

Gabriele：これで二人に共通点ができたね。



Arianna : ごめんなさい ! そんなつもりじゃ……
Nadia : 元に戻せるわ。でも二人とも前の姿になる。同じ魔法だから。
Arianna : うん。全部元に戻して。



M.N. Pops : その髪、気に入っていたの？
Arianna : うん、でも……
M.N. Pops : けど、これも悪くないな。



M.N. Pops : その髪はそのままでもいい。私はこのひげを残すよ。

Tatiana : ほら。もう満足している人が一人。



Nadia : 明かりをともししてみましょう。 M.N. Popa : 今度は私が。



M.N. Popa : これで合っていますか？ Nadia : 明かりは
つきましたね。 M.N. Popa : ええ。場所が違うけど。



M.N. Popa : はい。君がつけて。 Arianna : まだ信じて
くれるの？ M.N. Popa : ちょっと離れるまで待ってね。

Lilia : これ、あなたたちが作ったの？
Tatiana : 私が。少し手伝ってもらったけど。

Gabriele : お父さんは
花火担当だったんだ。
M.N. Popa : そして今
夜の公演は終了です。



Nadia : 本当に、その姿のまま出発するの？
Arianna : 私はそうする。

M.N. Popa : 私も。このひげに愛着が湧いてきたよ。



Tatiana : Titti、ご挨拶しましょう。もう行かなくちゃ。

みんな : メリークリスマス！

Arianna : 水みたい……でも、ぬれない！
Tatiana : 袖を見てごらん。

M.N. Popa : Tittiまで色
が変わってる。
Gabriele : においがする
か、確かめてるみたい。



Lumen : Oneiriaへようこそ。私はLumen。こちらはOmbraです。

Arianna : さっきまで反対側にいたのに！
Lumen : どうぞ。お祝いで、まだ散歩する時間があります。



Tatiana：ここからだ、あの家が
曲がって見えるわ。
Gabriele：僕のほうへ一歩来て。

Tatiana：あら。今度はまっすぐ！
Lumen：家はずっと同じ場所にあ
ります。届く光が変わるのです。



Arianna : Titti、こっちだよ！

Gabriele : もう一つ見えていたんだね。

M.N. Popa : 目には二つ。でも鼻には一つだった。



Arianna：お母さん、見て！
ひだが薄紫になった。
Tatiana：もう一度動かし
て。今度は金色も見えるわ。

M.N. Popa：こんな服なら、朝、
色選別に悩まなくて済むね。



Sirel：贈り物につける飾りを作っているの。やってみる？

Gabriele：想像するだけでいいの？
Sirel：一つ決めて、頭の中にはっきり思い浮かべてみて。





Gabriele : 結び目を考えていたんだけど。
Arianna : 結晶になっちゃったね !

M.N. Popa : それでどうやって包みを結ぶのか、見てみたい
な。
Sirel : お祝いに持って行って。飾れる場所はきっとあるわ。

Sirel : 広場に行くの？ 一緒に行きましょう。
Tatiana : これは私が持ちます。

M.N. Popa : じゃあ、私はお盆を。
Gabriele : 最初に目をつけていたよね。



Arianna：飾りを作っていた人たちもいる！
Lumen：今夜はみんな、ここに集まるのです。

Tatiana：お手伝いが
できてよかったわ。



Lumen：食卓の支度ができました。色
選びを手伝ってくれますか？

Tatiana：クリスマスなら、私は赤ね。

M.N. Popa：それに金色。

Lumen：一緒に思い浮かべてみましょう。



Arianna : ここまで広がってくる !
Gabriele : 窓を見て。

Tatiana : 広場全体が、お
めかししているみたい。



M.N. Popa : ほら、金色だ！
Arianna : Gabriele、あの雪の結晶！

Gabriele : ほらね？ ちゃんと居場所が見つかった。



Sirel : どうぞ。席を取っておいたわ。
Tatiana : すてきな食卓ね。

Lumen : 友よ、メリークリスマス。
みんな：メリークリスマス！



Arianna : 雪の結晶はここに置いていくの？
Lumen : もちろん。あなたたちが持ってきてくれたのですから。
M.N. Popa : じゃあ、私たちのクリスマスも少し残していこう。

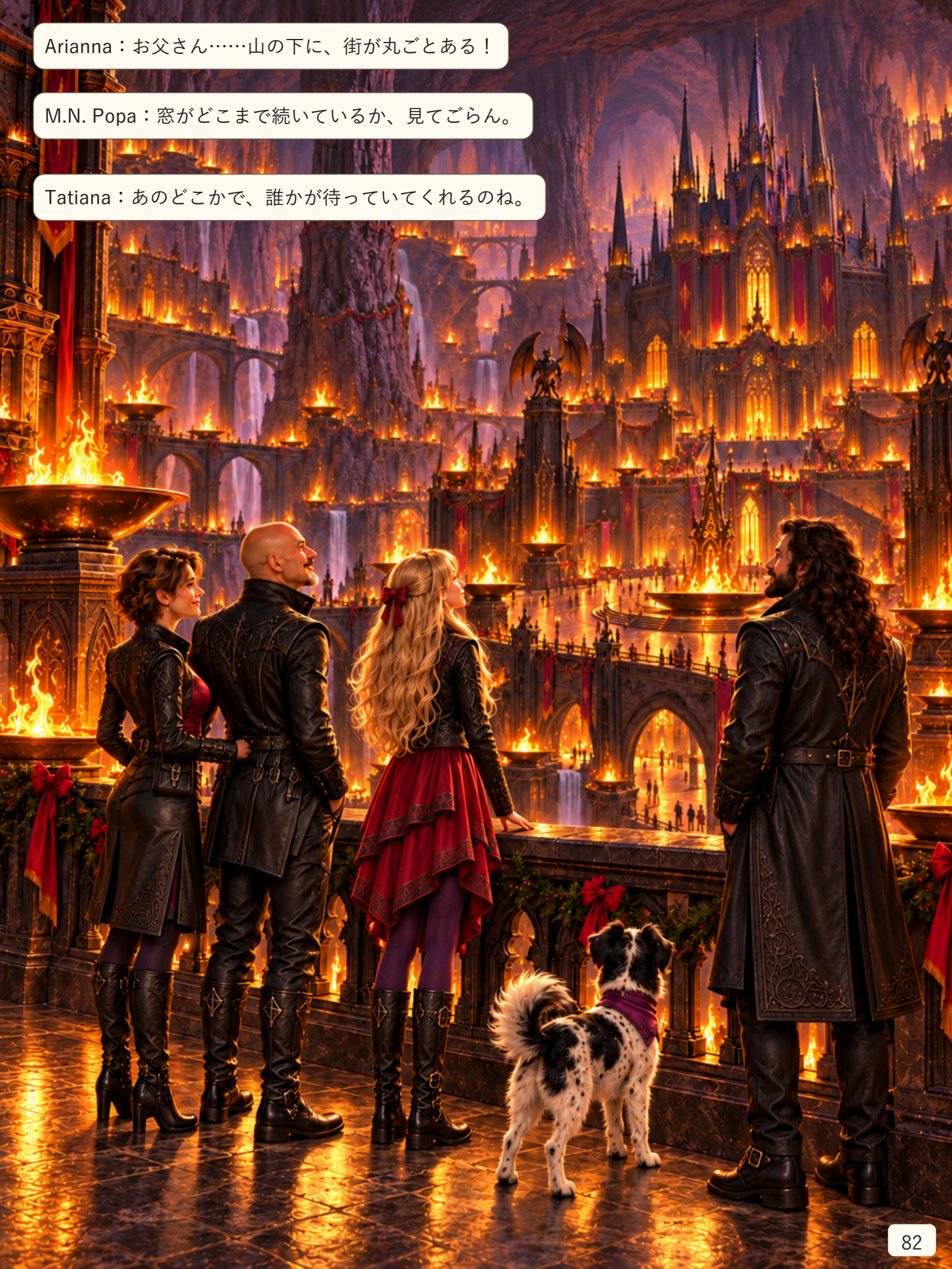
Tatiana : Titti、いらっしや
い。ご挨拶しましょう。
Gabriele : 次はNoxariumだ。



Arianna：お父さん……山の下に、街が丸ごとある！

M.N. Popa：窓がどこまで続いているか、見てごらん。

Tatiana：あのどこかで、誰かが待っていてくれるのね。



Lucien : Noxariumへようこそ。私たちが案内します。

Bony : 道順を用意したよ。

Lucien : 全部の台所を通るのかい？

Bony : だいたい全部。



Veshra : 気をつけて。パンはまだ熱いよ。

Gabriele : 一つもらって、みんなで分けよう。

M.N. Popa : まずは一つね。



Grimmo : これを押さえていてくれるかい？

M.N. Popa : そうですか？

Arianna : 赤いリボンもつける？

Grimmo : それなら、君たちが
お祝いに持っていっておくれ。



Gabriele：ここからだ、市場が全部見える。

Mordek：パンが焼けたにおいも届くよ。

M.N. Popa：それなら、上ってくる前から見つけていました。





Velka：これは宴会
場へ持っていくの。

Bony：散歩が配
達になってきた。

Tatiana：私たちが運びます。

Lucien：素敵な仲間との配達だね。



Arianna : あの耳を見て……

Tatiana : 待って。向こうから来るのを待ちましょう。

M.N. Popa : Tittiはもうわかっているね。



Arianna : あの子、遊びたいんだ！

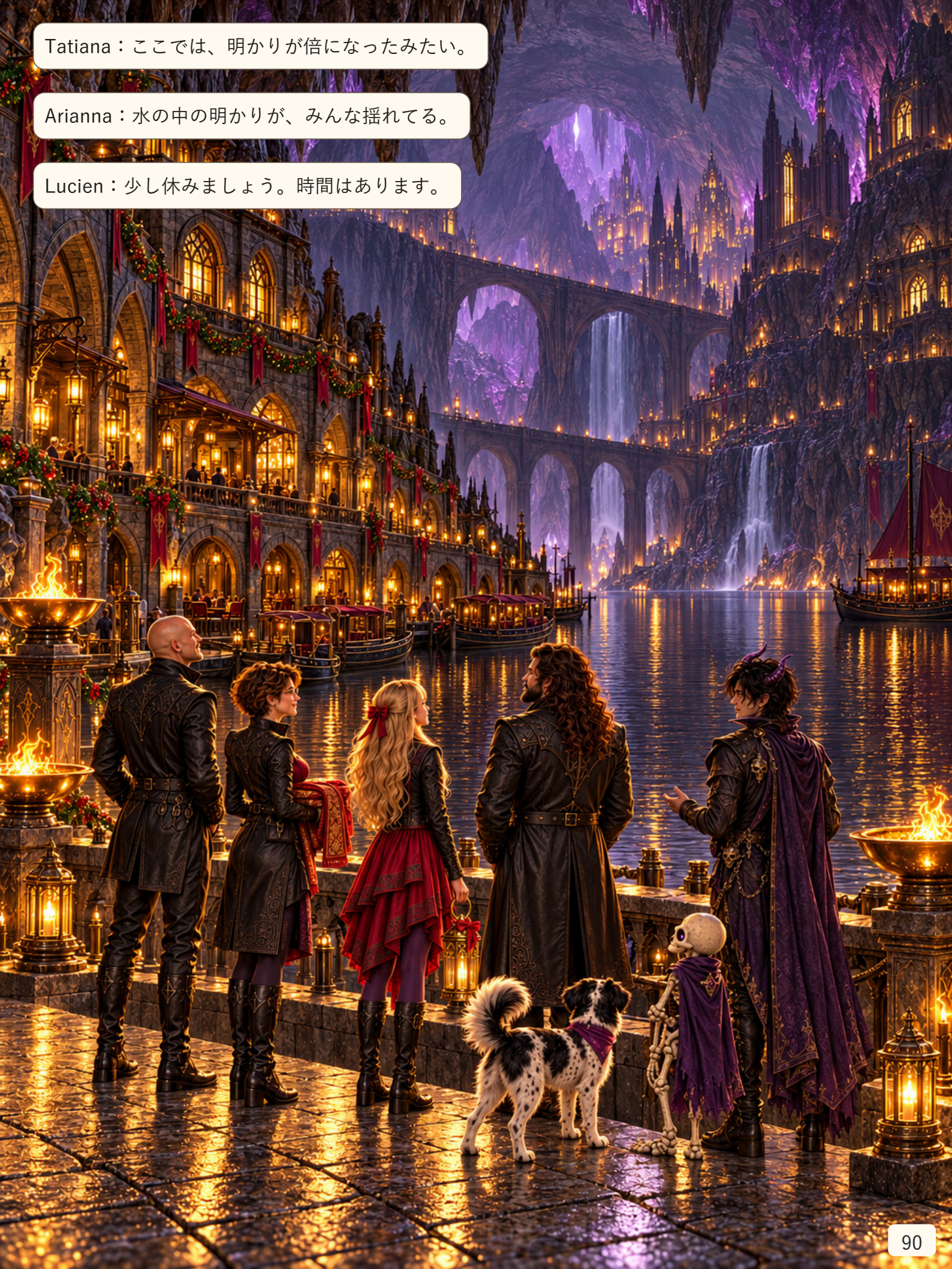
Gabriele : Titti、僕たちはお客だよ。ここに住みつくわけにはいかないからね。

M.N. Popa : そんな案を教えないでくれ。

Tatiana：ここでは、明かりが倍になったみたい。

Arianna：水の中の明かりが、みんな揺れてる。

Lucien：少し休みましょう。時間はあります。



Bony : 出発したときは、ほんの数人だったのに。

Gabriele : 今は市場の半分と一緒に来たみたいだ。

Lucien : あとは扉を開けてくれる人だけですわね。



Rudrak : この長椅子はここでいいかい？

M.N. Popa : 少し詰めれば、あと二人座れます。

Tatiana : じゃあ、お皿を二枚持ってくるわ。



Gabriele：夕食の分も、おなかを空けておけて言ったよね。

M.N. Popa：空けておいたよ。こんなに必要だとは思わなかったけど。

Tatiana：また話が始まる前に、パンを取ってちょうだい。



Lucien：ここまで遠い道に来てくれた皆さんに。

M.N. Popa：そして、私たちの席を残してくれた皆さんに。

Tatiana：メリークリスマス。



Arianna：ランタンはつけたままにしておく？

Bony：よい旅を。Atlantisにもよろしく！

Lucien：もちろん。そこがぴったりです。

M.N. Popa：必ず伝えるよ。
みんな、メリークリスマス。



Arianna：お母さん、見て！ 扉まで海が来てる。

M.N. Popa：扉が持ちこたえてくれるといいけど。

Aren：もうすぐ、皆さんがその向こうへ渡るのです。



Aren : これは皆さんへの贈り物です。身につけている間は息ができ、私たちと一緒に深い海へ下りられます。

Tatiana : 話すことも？

Aren : ええ。寒さや水圧からも守ってくれます。



Arianna：息ができる……お父さん、本当に息ができる！

M.N. Popa：まだ息を止めていたよ。

Gabriele：Tittiはもう行っちゃった。



Tatiana：あんな上にも家があるのね。

Gabriele：ここなら、屋根の上を
通って隣の家に行ける。

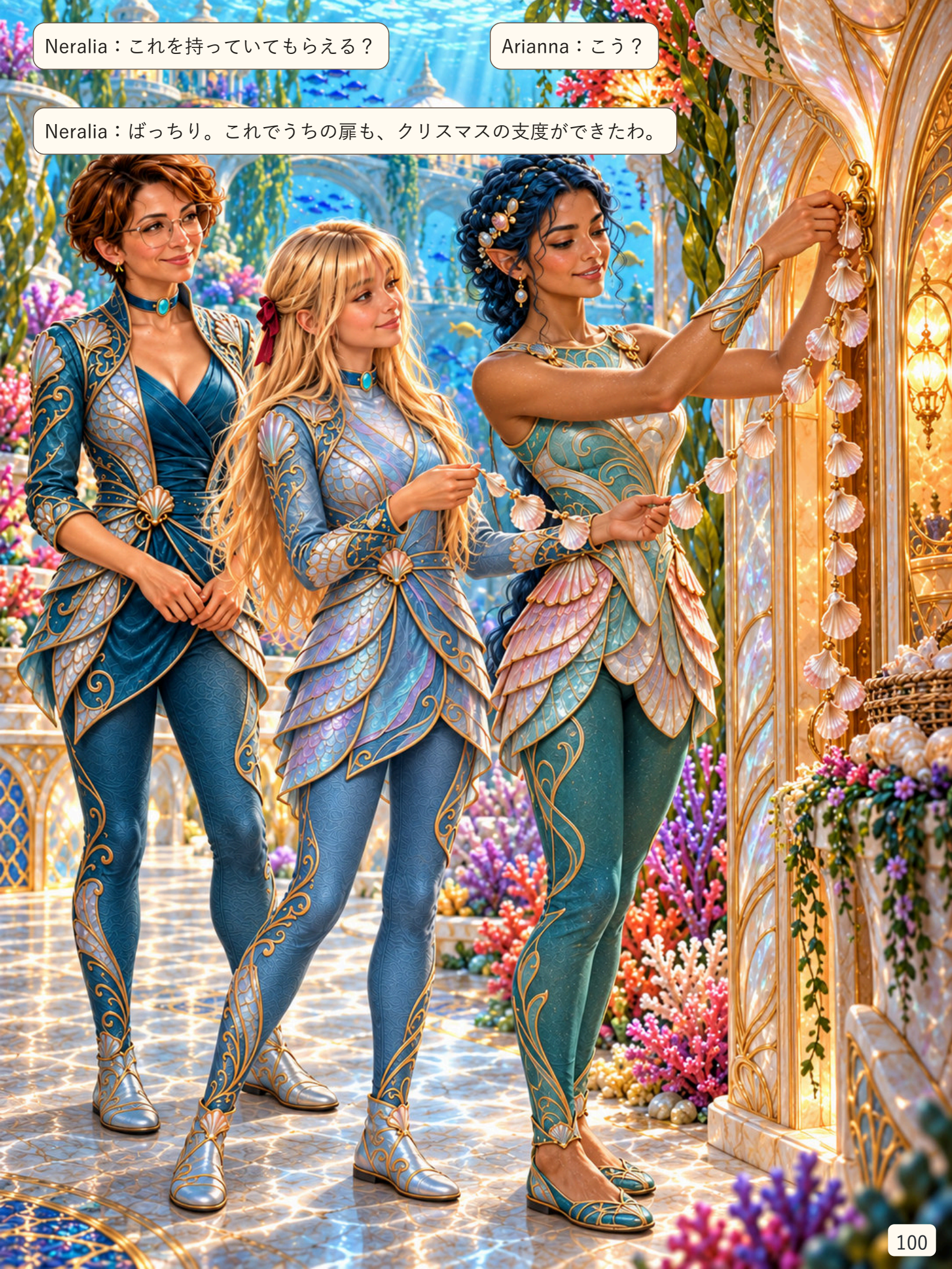
M.N. Popa：やっと階段を上
なくていい場所に来た。



Neralia : これを持っていってもらえる ?

Arianna : こう ?

Neralia : ばっちり。これでうちの扉も、クリスマスの支度ができたわ。



Corven : 光のほうへ向けてみてください。

M.N. Popa : これを広
場へ持っていこう。

Tatiana : さっきは白かったの
に……今はピンクと水色だわ。



Arianna : Titti、そっ
とね。隠れちゃうよ。

M.N. Popa : 横に歩くから、どこを
見ればいいのかわからないんだね。

Gabriele : やっとTittiを立ち止まらせる相手がいた。



Arianna : 飛んでいるみたい。

Talise : ここで待っていて。
そばを通ってくれるわ。

Tatiana : ひれの影が海底に映っているのを見て。



Gabriele：ここからじゃ、
太陽がほとんど見えない。

Arianna：でも、下に明
かりがいっぱいあるよ。

Aren：止まりましょう。あのテラスからなら、もっとよく見えます。



Orel：お待ちしていました。市場で何か見つかりましたか？

Gabriele：これ。どこに置けばいい？

Orel：どうぞ、こちらにまだ場所があります。



M.N. Popa : 待って……何も見えない。

Arianna : お父さん、リボンに選ばれたね。

Tatiana : じっとして。取ってあげる。



Corven：ここに留めて。小片は回れるようにしておいてください。

M.N. Popa：全部動かないようにしていました。

Arianna：これで、どこからの光も受けられるね！



Aren : 友よ、メリークリスマス。

Tatiana : Atlantis、メリークリスマス！

M.N. Popa : 上の皆さんにも。下の皆さんにも！

Arianna : お父さん、みんな手を振ってくれてる。



Arianna : また歩くのって、変な感じがしそう。

Aren : また来たくなったら、いつでも案内します。

M.N. Popa : 階段の上を通れなくなるのが寂しいな。

Tatiana : さようなら、Aren。さようなら、Dely。



Arianna : さっきまで海の下……今度は雲の上！

M.N. Popa : ここは歩けるといいけど。

Kallia : Olympusへようこそ。どうぞ、ご案内します。



M.N. Popa : やっと階段の上を通るのに慣れたのに。

Tatiana : また段数を数えられるわね。

Gabriele : 言っちゃだめだよ。一段目で止まっちゃう。



Tatiana : パンのいいにおい！

Kallia : 広場の夕食を準備しているところです。

M.N. Popa : ちょうどいい時間に着いたね。



Gabriele : 全部、手で描いているの？

Damon : 葉っぱを一枚ずつね。

M.N. Popa : 私なら二枚目で、
もうしみをつけているよ。



Arianna : 近づいてもいい？

Kallia : ええ、ゆっくり。向こうから来るのを待ってね。

Tatiana : ほら、もうにおいをかいでいるわ。



Tatiana : ここからだ、山が
どこまで続くのか見えないわ。

Gabriele : 庭が浮かんでいるみたい。

Kallia : 来てください。紹介したい相手がいるんです。



Arianna：ライオンの体……
それにワシのくちばし。

M.N. Popa：私たち全員を見ているね。

Kallia：ここにいきましょう。十分に場所を空けてあげて。



Arianna : Titti、誰がいるか見て。

Tatiana : そっとね。まずはお互いを知りましょう。

M.N. Popa : この子なら、Tittiを見るのにかがまなくていいね。



Gabriele : 遊ぼうって誘ってる。

Arianna : Tittiはもう「うん」って。

M.N. Popa : でも、飛ぶ競争はなしだよ。



Melia : この歌、知っている？

Tatiana : いいえ。でも歌いたくなるわ。

Melia : じゃあ今夜、来てね。一緒に歌ってみましょう。



Kallia：この長椅子を運ぶのを手伝ってくれますか？

M.N. Popa：お客さんは何人来るんですか？

Damon：まず、席を少し多めに作っておきましょう。



Gabriele : 見せてくれた器だ !

Damon : そうだよ。今度は、もう
少し向こうへ回してくれるかい。

M.N. Popa : こんなにパンが入っているなら、喜んで。



Gabriele : おいで、ここが空いてる！

Tatiana : 少し詰めましょう。

Kallia : 友よ、メリークリスマス。

Arianna : Olympus、メリークリスマス！



Arianna：本当に、最後の目的地まで来たんだね。

M.N. Popa：でも次は、私たちが招待する番だ。

Tatiana：どの食卓にも、私たちの席があったわ。

Kallia：それなら、二人分の席を取っておいてください。



Tatiana : 家に帰ってきたわね。

M.N. Popa : 今は、誰の席を空けておけばいいかわかるね。



贈り物は続いていく

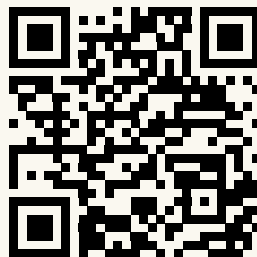
お祝いの日々と私の物語に意味を与えてくれる家族に、ありがとう。そして、一緒に旅をしてくれたあなたにも、ありがとう。

あなたが温かく迎えられ、誰かのために時間を持てるクリスマスになりますように。もしできたら、招かれると思っていない誰かの席も空けておいてください。

この本で笑顔になれたなら、友達にリンクを送ってください。小さな贈り物も、遠くまで届きます。

公開中の各版は、この本の専用ページで見つかります。
valenelya.com/il-natale-che-unisce-i-mondi
無料でダウンロードでき、リンクを共有することもできます。

次の旅がどこへ続いていても、メリークリスマス。



制作・お問い合わせ

世界をつなぐクリスマス
© 2026 M.N. Popa · VALENELYA
無料デジタル版・日本語

原案、物語世界、登場人物、物語構成、創作監修：M.N. Popa。

文章・台詞は、作者の指示と推敲のもと、ChatGPTの支援を受けて制作しました。

イラストは、作者の指示と参考資料に基づき、ChatGPTの画像生成ツールで制作しました。

レイアウトとデジタル版制作：ChatGPTおよびCodexによる支援。

日本語翻訳・表現調整：ChatGPTおよびCodexによる支援。

M.N. Popaは、物語世界VALENELYAの創作者です。公式サイトでは、ほかの物語や無料コンテンツをご覧ください。

公式サイト：valenelya.com
本のページ：valenelya.com/il-natale-che-unisce-i-mondi
作者への連絡：info@valenelya.com